

雪靈統記

泉鏡花

青空文庫

機会がおのずから来ました。

今度の旅は、一体はじめは、仲仙道線で故郷へ着いて、そこで、一あるよう事を済すましたあとを、姫路行の汽車で東京へ帰ろうとしたのであります。——この列車は、米原まいばらで一体分身して、分れて東西へ馳はしります。

それが大雪のために進行が続けられなくなつて、晩方武生たけふ駅（越前えちぜん）へ留つたのです。強いて一町場ひとちようばぐらいは前進出来ない事はない。が、そうすると、深山の小駅ですから、旅舎にも食料にも、乗客に対する設備が不足で、危険であるからとの事でありました。

元来——帰途にこの線をたよつて東海道へ大廻りをしようとしたのは、……実は途中で決心が出来たら、武生へ降りて許されない事ながら、そこから虎杖いたどりの里に、もとの蔦屋つたや（旅館）のお米よめさんを訪ねようという……見る見る積る雪の中に、淡雪の消えるような、あだなのぞみがあつたのです。でその望のぞみを煽あおるために、もう福井あたりから酒さえ飲んだのであります。酔いもしなければ、心も定きまらないのであります。

ただ一夜、徒らに、思出の武生の町に宿つても構わない。が、宿りつつ、そこに虎杖の里を彼方に視て、心も足も運べない時の儂さにはなお堪えられまい、と思いなやんでいますうちに――

汽車は着きました。

目をつむつて、耳を圧えて、発車を待つのが、三分、五分、十分十五分――やや三十分過ぎて、やがて、駅員にその不通の通達を聞いた時は！

雪がそのままの待女郎になつて、手を取つて導くようで、まんじ巴の中空を渡る橋は、さながらに玉の棧橋かと思われました。

人間は増長します。――積雪のために汽車が留つて難儀をすると言えば――旅籠は取らないで、すぐにお米さんの許へ、そうだ、行つて行けなそうな事はない、が、しかし……と、そんな事を思つて、早や壁も天井も雪の空のようになった停車場に、しばらく考えていきましたが、余り不躑だと己を制して、やっぱり一旦は宿に着く事にしましたのですから、同列車の乗客の中で、停車場を離れたのは、多分私が一番あとだったろうと思ひます。

大雪です。

「雪やこんこ、

霰あられやこんこ。」

大雪です——が、停車場ステーション前の茶店では、まだ小児たちの、そんな声が聞えていました。その時分は、山の根笹を吹くように、風もさらさらと鳴りました。町へ入るまでに日もとつぷりと暮果てますと、

「爺じいさいのウ婆ばあさいのウ、

綿雪小雪が降るわいのウ、

雨炉も小窓もしめさつし。」

と寂しい侘わびしい唄うたの声——雪も、小児こどもが爺婆じいばあに化けました。——風も次第に、ごうごうと樹ながら山を揺ゆりました。

店屋いえなさえもう戸しほが閉とまる。……旅籠屋も門とぎを閉とめました。

家名いえなも何も構かまわず、いまそこも閉めようとする一軒の旅籠屋へ駈かけこ込みましたのですから、場所は町まちの目貫めぬきの向むきへは遠いけれど、鎮守の方へは近かったのです。

座敷は二階で、だだっ広い、人気の少ないさみしい家で、夕餉ゆうげもさびしゅうございまして。

若狭鰈——大すきですが、それが附木のように凍っています——白子魚乾、切干
大根の酢、椀はまた白子魚乾に、とろろ昆布の吸もの——しかし、何となく可懐くつ
て涙ぐまるるようでした、なぜですか。……

酒も呼んだが酔いませぬ。むかしの事を考えると、病苦を救われたお米さんに対して、
生意気らしく恥かしい。

両手を炬燵にさして、俯向いていました、濡れるように涙が出ます。

さつという吹雪であります。さつと吹くあとを、ごうーと鳴る。……次第に家ごと揺る
ほどになりましたのに、何という寂寞だか、あの、ひっそりと障子の鳴る音。カタカタ
カタ、白い魔が忍んで来る、雪入道が透見する。カタカタカタカタ、さーツ、さーツ、ご
うごうと吹くなかに——見る見るうちに障子の棧がパツパツと白くなります、雨戸の際へ
鳥の嘴程吹込む雪です。

「大雪の降る夜など、町の路が絶えますと、三日も四日も私一人——」
三年以前に逢った時、……お米さんが言ったのです。

……………
「路の絶える。大雪の夜。」

お米さんが、あの虎杖の里の、この吹雪に……

「……ただ一人。」——

私は決然として、身ごしらえをしたのであります。

「電報を——」

と言つて、旅宿を出ました。

実はなくなりました父が、その危篤きじくの時、東京から帰りますのに、（タダイマココマデキマシタ）とこの町から発信した……偶ふとそれを口実に——時間は遅くはありませんが、目口もあかない、この吹雪に、何と言つて外へ出ようと、放火つけびか強盗、人ひと殺ころしに疑われはしまいかと危あやぶむまでに、さんざん思い惑まじつたあとです。

ころ柿のような髪を結つた霜げた女中が、雑炊ぞうすいでもするのでしよう——土間で大釜おおがまの下を焚たいていました。番頭は帳場に青い顔をしていました。が、無論、自分たちがその使つかいに出ようとは怪我けがにも言わないのであります。

「どうなるのだろう……とにかくこれは尋常事じやない。」

私は幾度となく雪に転び、風に倒れながら思ったのであります。

「天狗の為す業だ、——魔の業だ。」

何しろ可恐い大な手が、白い指紋の大渦を巻いているのだと思いました。

いのちとりの吹雪の中に——

最後に倒れたのは一つの雪の丘です。——そうは言っても、小高い場所に雪が積ったのではありません、粉雪の吹溜りがこんもりと積ったのを、哄と吹く風が根こそぎにその吹く方へ吹飛ばして運ぶのであります。一つ二つの数ではない。波の重るような、幾つも幾つも、颯と吹いて、むらむらと位置を乱して、八方へ高くなりあります。

私はもう、それまでに、幾度もその渦にくるくると巻かれて、大な水の輪に、子子虫が引くりかえるような形で、取っては投げられ、掴んでは倒され、捲き上げては倒されました。

私は——白昼、北海の荒波の上で起る処のこの吹雪の渦を見た事があります。——一度は、たとえば、敦賀湾でありました——絵にかいた雨竜のぐるぐると輪を巻いて、一条、ゆつたりと尾を下に垂れたような形のものが、降りしきり、吹煽って空中に薄黒

い列を造ります。

見ているうちに、その一つが、ぱつと消えるかと思うと、たちまち、ぽつと、続いて同じ形が顛あらかわれます。消えるのではない、幽かすかに見える若狭わかさの岬へ矢のごとく白くなって飛ぶのです。一つ一つがみなそうでした。——吹雪の渦は湧わいては飛び、湧いては飛びます。

私の耳を打ち、鼻を振ねじつつ、いま、その渦が乗つては飛び、掠かすめては走るんです。

大波に漂う小舟は、宙天に揺ゆすりあげ上らるる時は、ただ波ばかり、白き黒き雲の一片をも見ず、奈落に揉もみおと落さるる時は、海底の巖いわの根なる藻の、紅あかき碧あおきをさえ見ると言います。

風の一息死ぬ、真空の一瞬時には、町も、屋根も、軒下の流ながれも、その屋根を圧して果はてなく十重とえはたえ二十重はたえに高く聳たち、遙はるかに連る雪の山脈も、旅籠はたごの炬燵こたつも、釜かまも、釜の下なる火も、果は虎杖の家、お米さんの薄色の袖、紫陽花あじさい、紫の花も……お米さんの素足さえ、きつぱりと見えました。が、脈を打つて吹雪が来ると、呼吸は咽むせんで、目は盲めしいのようになるのでありました。

最早もはや、最後かと思う時に、鎮守やしろうの社が目の前にあることに心着いたのであります。同時に峰とがの尖つたような真まっしろ白な杉の大木を見ました。

雪難之碑のある処——

天狗——魔の手など意識しましたのは、その樹のせいかも知れません。ただしこれに目標しるしが出来たためか、背に根が生えたようになって、倒れている雪の丘の飛移るような思しいはなくなりました。

まことは、両側にまだ家のありました頃は、——中に旅籠も交っています——一面識はなくなつても、同じ汽車に乗った人たちが、疎まぼろにも、それぞれの二階こもに籠こもっているらしい、それこそ親友が附添ついでっているように、氣丈夫に頼母たのもしかつたのであります。もつともそれを心あてに、頼む。——助けて——助けて——と幾いくたび度か呼びました。けれども、窓一つ、ちらりと燈ともしび火の影の漏れて答うる光もありませんでした。聞える筈はずもありません。

いまは、ただお米さんと、間に千尺の雪を隔つるのみで、一人死を待つ、……むしろ目を瞑ねむるばかりになりました。

時に不思議なものを見ました——底そこひなき雪の天空の、なおその上を、プスリと鑿のみで穿うがつてその穴から落ちこぼれる……大きさはそうです……蠟ろうそく燭の灯の少し大いほどな真蒼まっさおな光が、ちらちらと雪を染め、染めて、ちらちらと染めながら、ツツと輝いて、その古杉こすぎの梢こすえに来て留とどまりました。その青い火は、しかし私の魂がもう藻脱もだつけて、虚空へ飛とんで、倒たに下の亡骸なきがらを覗のぞいたのかも知れません。

が、その影が映すと、半ば埋れた私の身体は、ぱつと紫陽花に包まれたように、青く、藍に、群青になりました。

この山の上なる峠の茶屋を思い出す——極暑、病気のため、俣で越えて、故郷へ帰る道すがら、その茶屋で休んだ時の事です。門も背戸も紫陽花で包まれていました。——私の顔の色も同じだったろうと思う、手も青い。

何より、嫌な、可恐い雷が鳴ったのです。たださえ破れようとする心臓に、動悸は、破障子の煽るようで、震える手に飲む水の、水より前に無数の蚊が、目、口、鼻へ飛込んだのであります。

その時の苦しさ。——今も。

三

白い梢の青い火は、また中空の渦を映し出す——とぐろを巻き、尾を垂れて、海原のそれと同じです。いや、それよりも、峠で尾根に近かった、あの可恐い雲の峰にそっくりであります。

この上、雷。

大雷は雪国の、こんな時に起ります。

死力を籠めて、起上ろうとすると、その渦が、風で、ごうと巻いて、捲きながら乱ると見れば、計知られぬ高さから颯と大滝を揺落すように、泡沫とも、しぶきとも、粉とも、灰とも、針とも分かず、降埋める。

「あつ。」

私はまた倒れました。

怪火に映る、その大滝の雪は、目の前なる、ズツンと重い、大な山の頂から一雪崩れに落ちて来るようにも見えました。

引挫がれた。

苦痛の顔の、醜さを隠そうと、裏も表も同じ雪の、厚く、重い、外套の袖を被ると、また青い火の影に、紫陽花の花に包まれますように、且つ白羽二重の裏に薄萌黄がすと透るようでした。

ウオオオオ!

俄然として耳を嚙んだのは、凄く可恐い、且つ力ある犬の声でありました。

ウオオオオオ!

虎の嘯うそぶくとよりは、竜の吟ずるがごとき、凄烈せいてつ悲壮な声であります。

ウオオオオオ!

三声を続けて鳴いたと思うと……雪をかついだ、太く逞たくましい、しかし瘦やせた、一頭の和犬、むく犬の、耳の青竹をそいだように立ったのが、吹雪の滝を、上の峰から、一直線に飛下りたごとく思われます。たちまち私の傍そばを近々と横ぎって、左右に雪の白泡しらあわを、ざつと蹴立けたてて、あたかも水雷艇の荒浪を切るがごとく猛然として進みます。

あと、ものの一町ばかりは、真白まっしろな一条の路が開けました。——雪の渦が十才ばかりぐるぐると続いて行く。……

これを反対にすると、虎杖の方へ行くのであります。

犬のその進む方は、まるで違った道でありました。が、私は夢中で、そのあとに続いたのであります。

路は一面、渺々びようびようと白い野原になりました。

が、大犬の勢いきおいは衰えません。——勿論、行くあとに行くあとに道が開けます。渦が続いて行く……

野の中空を、雪の翼を縫つて、あの青い火が、蜿々うねうねと螢のように飛んで来ました。
真正面まっしょうめんに、凹字形おうじけいの大きな建ものが、真白まっしろな大軍艦のように朦朧もうろうとして顕れあらわました。と見ると、怪し火は、何と、ツツツと尾を曳ひきつつ、先へ斜ななめに飛んで、その大屋根の高い棟なる避雷針の尖端とつたんに、ぱつと留つて、ちらちらと青く輝きます。

ウオオオオオ

鉄づくりの門の柱の、やがて平地と同じに埋うづまった真中まんなかを、犬は山を乗るように入ります。私は坂を越すように続きました。

ドンと鳴つて、犬の頭突ずつきに、扉が開あいた。

余りの嬉しさに、雪に一度手を支つかえて、鎮守の方を遥ようはい拝しつつ、建ものの、戸を入りました。

学校——中学校です。

ト、犬は廊下を、どこへ行つたか分りません。

途端に……

ざっざつと、あの続いた渦が、一ツずつ数万の蛾がの群つたような、一人の人の形になつて、縦隊一列に入つて来ました。雪で束つかねたようですが、いずれも演習行軍の装よそおいして、真ま

先なのは刀を取つて、ぴたりと胸にあてている。それが長靴を高く踏んでずかりと入る。あとから、背囊、荷銃したのを、一隊十七人まで数えました。

うろつく者には、傍目も触らず、肅然として廊下を長く打つて、通つて、広い講堂が、青白く映つて開く、そこへ堂々と入つたのです。

「休め——」

……と声する。

私は雪籠りの許を受けようとして、たどたどと近づきましたが、扉のしまつた中の様子を、硝子窓越しに、ふと見て茫然と立ちました。

真中の卓子を囲んで、入乱れつつ椅子に掛けて、背囊も解かず、銃を引つけたまま、大皿に装つた、握飯、赤飯、煮染をてんでんに取っています。

頭を振り、足ぶみをするのなぞ見えませんが、声は籠つて聞えません。

——わあ——

と罵るか、笑うか、一つ大声が響いたと思うと、あの長靴なのが、つかつかと進んで、半月形の講壇に上つて、ツと身を一方に開くと、一人、真すぐに進んで、正面の黒板へ白墨を手にして、何事をか記すのです、——勿論、武装のままでありました。

何にも、黒板へ頭れません。

続いて一人、また同じ事をしました。

が、何にも黒板へ頭れません。

十六人が十六人、同じようなことをした。最後に、肩と頭かしらと一団いっ団になったと思うと——その隊長と思うのが、衝つと面おもてを背けました時——苛いらつように、自棄やけのように、てんでんに、一いち齊じきに白墨チヨオクを投げました。雪が群ぐんつて散るようです。

「気をつけ。」

つつと鷲わしが片翼ひとつばを長く開いたように、壇だんをかけて列れつが整う。

「右向け、右——前へ！」

入口が背後にあるか、……吸すわるるように消えました。

と思うと、忽こつ然ねんとして、頭あたまれて、むくと躍とつて、卓子テエブルの真中まんなかへ高く乗のつた。雪を払はえば咽喉のど白くして、茶ちやの斑まだらなる、畑はた將軍じやうじんのさながら犬獅子けんじし……

ウオオオオオ!

肩せうを聳そばだて、前脚ぜんきゃくをスクと立てて、耳みみがその円天井まるてんじやうへ届とくかとして、嚇かつと大口おほくちを開けて、まがみは遠く黒板くろばんに呼吸いきを吐はいた——

黒板は一面真白な雪に変わりました。

この猛犬は、——土地ではまだ、深山にかくれて生きている事を信ぜられています——雪中行軍に擬して、中の河内を柳ヶ瀬へ抜けようとした冒険に、教授が二人、某中学生が十五人、無慙にも凍死をしたのでした。——七年前——

雪難之碑はその記念だそうであります。

——その時、かねて校庭に養われて、嚮導に立つた犬の、恥じて自ら殺したとも言い、しからずと言うのが——ここに頭れたのであります。

一行が遭難の日は、学校に例として、食饌を備えるそうです。ちようどその夜に当たつたのです。が、同じ月、同じ夜のその命日は、月が晴れても、附近の町は、宵から戸を閉じるそうです、真白な十七人が縦横に町を通るからだと言います——後でこれを聞きました。

私は眠るように、学校の廊下に倒れていました。

翌早朝、小使部屋の炉の焚火に救われて蘇生つたのであります。が、いずれにも、しかも、中にも恐縮をしましたのは、汽車の厄に逢つた一人として、駅員、殊に駅長さんの御立会になつた事でありました。

大正十（一九二一）年四月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十一巻」岩波書店

1941（昭和16）年9月30日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2005年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪霊続記

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>